

聖書：第二サムエル記13章1～14節

説教：今、主に話してください

1 登場人物

1) 悪賢い友人ヨナダブ

今日の箇所を読んでとまどわない方はいないでしょう。アムノンとタマルは母親は違うのですが父親は同じダビデですから、異母兄弟、または腹違いとも言いますが、そのような間柄になります。アムノンはその事実を知りながら、周りの人たちをだまし、暴力によって近親相姦という罪を犯していきます。こんな悲惨な話のどこに恵みがあるのでしょうか。

アムノンがタマルを恋しているということ自分の心の中にしまっていたのなら、こんなことは起きなかったでしょう。ところが、「非常に悪賢い男であった」と言われているヨナダブが、アムノンをそそのかします。仮病をつかって王であるダビデをだまし、タマルをおびき寄せなさい、そうすればあなたの願いはかなえられるだろうとアドバイスし、アムノンはそのとおりに実行していきます。

2) ダビデ家の中で犯された罪

この事件の登場人物について確認しておきます。1節。「ダビデの子アブシャロムにタマルという名の美しい妹がいたが、ダビデの子アムノンは彼女を恋していた。」

アブシャロムのことに少し触れておきます。彼はこの事件の後、父ダビデを憎むようになり、仲間を集めてクーデターを起こしていきます。実は、今日の箇所のことが、あとで国を揺るがすような政治事件に発展する火種となっていくのです。

そのことはとりあえずわきに置いて、1節からアブシャロム、タマル、そしてアムノン、この三人はすべてダビデの子であることに注目します。加えて、ヨナダブの父はシムアはダビデの兄弟ですから、ヨナダブから見るとダビデは叔父にあたります。ですから事件の登場人物全員がダビデと血縁関係にあったこととなります。

そのダビデも、この事件とまったく無関係であったわけではありません。アムノンが病気であると聞いたダビデは、仮病であることは知らずにアムノンを見舞いました。そのときアムノンは、タマルが自分のところに来るように王の名で命令を出して欲しいと願います。ダビデはそれを信じて、手配をいたします。だまされたとは言え、結果的にダビデはこの事件の片棒をかつぐ役割を果たしていたのです。

ダビデは、後でこの事件のことを知らされ、21節で「激しく怒った」とあります。しかし不思議なことに、ダビデがこの事件について徹底的な調査をしたとか、悪い者を懲らしめ、被害を受けたタマルを救ったというような話は出て来ません。ダビデはイスラエルのために神の敵と一生懸命戦ってきました。けれどもいざそれが自分のことや、身内のこととなると途端に甘くなるのです。パテ・シェバと不倫の罪を犯しながらそれを隠し通そうとしました。ここでも、身内で恥ずべき事件が起こっても何もしない。そういう弱さが後で大きな政治事件に発展していくのですが、そのことは14章以降で触れることにな

ります。

2 タマル

1) イスラエルでは、こんなことはしません。

今日は、タマルが苦しみに出会ったときにどんなことばを語ったのか、いくつかある中から二つのことばに目を留めていきます。

一つ目は12節のことばです。「イスラエルでは、こんなことはしません。」「こんなこと」とはなにか。いくつかの意味が含まれているように思います。最初に言いましたように、母親は違いますが二人は兄妹という関係です。レビ記18章11節にこうあります。「あなたの父の妻があなたの父に産んだ娘は、あなたの姉妹であるから、あなたはその娘を犯してはならない。」タマルは、この律法を根拠にイスラエルではこんなことはしないと語ったとすることができます。

しかしそれだけではありません。当然のことですが、仮病をつかって人をだまし、そして最後は暴力によって自分の欲望を達成しようとする態度そのものへの非難も含まれています。イスラエルでなくても、どんな世界でもどんな時代でも、アムノンのしていることは人の道に反する卑劣な行為であると、だれもが怒るでしょう。どうして怒るのでしょうか。私たちが神のかたちに似せて造られているからです。罪によって目は曇っていますが、それでもなお神の正義を見分けることはできる。アムノンのしようとしていることは、神の正義に反することである。タマルはそのことを真正面から訴えます。

2) 今、王に話してください。

続いてタマルは13節でこう語ります。「今、王に話してください。」

いつも繰り返しますが、聖書はどこを開いても罪人である私たちの救いを示すために書かれていると見ることができます。たとえ今日のような悲惨な箇所であってもそうです。タマルが「王に話してください」と語ったところに救いの糸口があります。

王とは誰のことを指すのでしょうか。ダビデのことでしょうか。直接にはそのとおりでしよう。けれども、タマルが「ダビデに話してください」とも、あるいは「父上に話してください」とも言わず、「王に話してください」と言います。イスラエルの王はダビデのことだけなののでしょうか。ダビデの子孫として来られる主イエス・キリストこそイスラエルの真の王です。ですからタマルは自分の身に危険が迫ったとき、「救い主キリストに話してください」と叫んだことにもなります。叫んだのですが、残念ながらアムノンの耳には届きません。救い主は現れません。タマルははずかしめを受けていきます。

3 主イエス・キリスト

1) タマルの訴えはどうなったのか

タマルの必死の訴えはどうなったのでしょうか。どんなにタマルが叫んでも救いは与えられないように見えます。神の正義が曲げられ、ひとりの女性が悲しんでいくのを神は知っておられながら何もしない、そんなふうに見えます。

神はタマルのことに無関心なののでしょうか。そんなはずはありません。関心があるからこそ聖書に記すのです。では、どうしてタマルを助けないのでしょう。タマルだけではありません。今世界中に、タマルのような苦しみを味わわなければならない女性がいます。町に爆弾が落ちてくる、目の前で両親が

殺されていく、そんな子どもたちがいます。神がおられるというのなら、どうして神は悲惨な戦争や争い、暴力を止めないのか。多くの方が疑問に思っています。だから聖書の神を信じることができないと言う方もいます。

私はこの質問にうまく答えることはできません。けれども一つだけは言えると思います。聖書にタマルのことが書かれているということは、神はタマルのような女性を忘れていたのではない、いやタマルのことを心配している、タマルを助けたいと思っているから書いている。そのことは言えると思うのです。

いま「神は助けたいと思っている」と言いました。すぐに質問が来るでしょう。「神が助けるというのなら、どうしてここでタマルをすぐに助けないのか。」まったくそのとおりです。その質問に対して私は、「神の助け方は私たちが期待しているのとは違う場合がある」としか言えません。それでも反論があるでしょう。「ここで助けなかったなら手遅れではないか。違う場合があるなんてなにを悠長なことを言っている場合ではないはずだ。」

20 節には「タマルは、兄アブシャロムの家で、一人わびしく暮らしていた」とあります。言い換えれば「タマルは荒れ果てた人生を送った」ということです。私たちの目から見ると手遅れとしか見えません。

2) 必ずさばかれる

でももし手遅れというのなら、タマルのことを聖書に書くはずがありません。もしすべてが手遅れだというのなら、十字架も何の意味もないこととなります。けれども神のさばきに手遅れということはありません。どんなに昔の罪であろうとも、そのことは必ずさば

かれ、正義が回復される。十字架はそのことを示しています。ですから、アムノン罪、ヨナダブの罪は十字架でさばかれていきます。

3) 必ず救われる

「神のさばきはよいとして、ではタマルはどうなるのか。やっぱり手遅れだ」と思うのでしょうか。繰り返します。十字架の前で遅すぎるということはありません。タマルは十字架で救われていきます。もしタマルが救われないというのなら、聖書には載せられなかったはずです。タマルが救われていくから載せるのです。どんなに理不尽な出来事が襲いかかってきたとしても、すべてのものを奪われるようなことが起きたとしても、なお手遅れではない。神は必ずあなたを救い出し、悲しみの涙をぬぐい去り、元に戻していく。そのことを信じるようにと示されているのが十字架なのです。

私たちは、アムノンのように体の中からわき起こってくる罪の思いに圧倒され、よくないことをしてしまうかもしれません。神を信じて、どうすることもできません。そんな私たちに神はタマルの口を通して語ります。「今、王に話してください。」言い換えれば、こうです。「今、あなたは救い主イエス・キリストに話さない。」

話したからと言って、罪から逃れられる訳ではありません。話したからと言って苦しみや試練が去る訳ではないかもしれません。なお罪は私たちの前にあります。なお試練は前にあります。けれども主は、罪にとらわれて苦しんでいる私たちの訴えを聞き逃すような方ではありません。必ず聞いておられます。私たちを罪から救うために、この方はまっすぐに十字架に向かわれます。